

もう君を逃のがさない。

## 第一章

豪華なクリスタルシャンデリアが光り輝くホテルの会場。そこでは、色鮮やかなカクテルドレスをまとった女性たちやスーツを着た男性たちが、シャンパングラスを片手に談笑していた。

今日の新年パーティの主催は、アパレル業界で財をなした磯山グループ。招待客たちは、誰もがこの催しを楽しんでいる。上質な赤色のベルベットカーテンが引かれた壁際で軀を縮こまらせる、芦名美月以外は。

本来なら大学も卒業していない二十一歳の小娘が、このような華やかなパーティに出席できるはずもない。

美月がここにいる理由は、ただ一つ。これまで男手一つで美月を育ててくれた父が、昨年の秋に磯山グループの社長令嬢と再婚したためだ。

美月は父の再婚に大賛成だった。中学生の時に母が他界して以降、父は美月が寂しさを感じないよう、ずっと子育て第一で頑張ってきた。

そんな父が、ようやく心を開ける女性に出会えたのだ。反対する理由などない。これからは、また別の幸せを紡いでいってほしいと願っている。

義母になった女性も再婚で、前夫との間に二人の子どもがいる。義母は、彼ら実子と分け隔てなく美月にも愛情を注いでくれるぐらい、心優しい女性だ。『美月ちゃんにも慣れてほしいの』と新年パーティへの出席を懇願してきたのも、家族の絆をさらに深めたいという気持ちがあったからだろう。

美月の義兄妹となったのは、将来磯山グループを継ぐ二十六歳の倉崎宗介と、美月と同じ年で大卒四年生の倉崎愛菜。

再婚にあたり、義母は美月たち昔名の籍に入ったが、義兄妹は父方の倉崎の籍に残った。

義兄は父に、『私と妹は、お義父さんの籍に入りません。私たちはあくまで倉崎家の人間だからです。また美月さんは私にとっては義妹、愛菜にとっては生まれ月の関係で同年でも義姉になりませんが、私たちは、一個人として付き合い合せていただきます。ただ、縁あって家族になったのだから、美月さんを気遣うとお約束いたします』と宣言した。そして美月にも『俺のことを義兄とは呼ばないでほしい。俺たちは皆既に成人している。今更兄妹ごっこもないだろう？』と釘を刺したのだ。

父は宗介の意見を尊重し、『私たちは家族だ』と言って握手を交わした。そして美月には、義母に心配をかけないためにも、新しい家族を第一に考えてほしいと伝えたのだ。

こうした流れはあつたが、確かに宗介は、美月を気遣ってくれている。でもそれは、どちらかというと彼女が磯山家に迷惑をかけないかどうか見張っているといった態度だ。

美月は夫婦で招待客に挨拶する父たちを眺めたあと、堂々とした所作で動き回る義兄妹に視線を移した。

義兄妹は生まれた時から華やかな世界で生きてきたので、気後れせずにいろいろな人と会話を楽しんでいる。

しかし、美月は違う。一般家庭で生まれた美月が、彼らと同じ振る舞いなどできるはずがない。上流階級者が集うパーティに参加すること自体初めてだし、マナーすら知らないのだから……

そんな美月にできるのは、家族に迷惑をかけないために目立たずにいるだけだった。だからこそ誰の目にも留まらないように縮こまり、ひたすら手元のカクテルグラスに視線を落としている。

その時、すらりと伸びる綺麗な生脚が美月の視界に入った。それは目の前でぴたりと立ち止まる。「美月ちゃん、こんな端っこで何をしているの？ しかも一人で……」

鈴を転がすような声が響き、美月はゆっくり顔を上げる。

そこには緩やかに巻いた長い髪を結び上げ、華やかな薄紫のオフショルドレスを身に纏った美しい義妹がいた。

「愛菜ちゃん」

愛菜は微笑みながら美月に手を伸ばし、義母が見立ててくれたシャンパン色のレースチュールカクテルドレスに指を這わせる。

「このドレス、絶対にあたしの方が似合うのに、ママったら『美月ちゃんが着たら大人っぽく見える』とか言っただけで譲ってくれないんだもの。本当にムカつく！」

愛菜は美月に対して、必ずこういう険のある物言いをする。義理の姉妹として美月と仲良くする気などないと、態度で堂々と示すのだ。

美月は怯みそうになるのをぐっと堪え、愛菜の感情を逆撫でしないように用心しつつ口を開く。「このドレス、愛菜ちゃんが気に入ったのね。気分がなくてごめんなさい。今回はわたしが着てしまったけど、これからは愛菜ちゃんが使ってくれたら——」

「あたし、誰かのお下がりって嫌いな。特に……美月ちゃんのはね！」

美月に朗らかな表情を向けてはいるが、愛菜の瞳には冷たい光が宿っている。彼女から発せられる怒気に思わず身震いすると、彼女は美月の強張った頬を指先で軽くなぞった。

「あつ、埃がついてる」

そう囁いた愛菜が手を伸ばし、ふんわりと結われた美月の黒髪に触れる。その手が引かれた際、美月の頭皮に鋭い痛みが走った。

「……っ！」

顔をしかめる美月に、愛菜が申し訳なさそうな態度を取る。一方、彼女の口角は楽しげに上がった。

「やだ、ごめんなさい。埃を取ろうと思っただけなのに、爪に髪の毛が引つ掛かっちゃった」

ほんの数本ならまだしも、かなりの量の毛束が引き抜かれていた。鏡で確認しなくても、セツトしてもらった髪形が崩れているのがわかる。

酷い嫌がらせを受け、美月の目の奥にちくちくと刺すような刺激が走った。

どうしてこんな真似をするのだろう。仲良くとまではいかなくても、父や義母のためにも、普通に付き合いたいのに……

「どうした？ いったい何をしている？」

その時、相手の心を瞬時に凍らせる冷たい声が響き、美月は恐怖で震え上がった。

「お兄ちゃん！」

愛菜は隣に立つ宗介を見るなり、彼の腕に手をかけて甘える。そんな妹が可愛くて仕方がないと言わんばかりに、彼も目を細めて愛菜を見下ろした。

女性の目を惹き付ける端正な顔立ちと、男性的な魅力のあふれるしなやかな体躯。

磯山グループの跡取りとして本社の経営企画部で働く宗介は、つい先ほどまで社長である祖父の傍らにいた。おそらく愛菜が美月の傍に立つ姿を見て、心配して飛んできたのだろう。

二人の実父が事故で亡くなって以来、宗介は父の代わりにずっと妹を守ってきたという。そういう事情もあり、彼は妹の愛菜をことさら大切にしていた。今も彼女に対する愛情が軀中から満ちあふれている。だが、美月に顔を向けた途端、宗介の雰囲気は一変した。美月を見る目には、冷淡な色が宿っている。

「なんてだらしな性格をしているんだ。さっさと化粧室へ行つて、身なりを整えてきなさい。それぐらいの判断もできないのか？」

「お兄ちゃん、美月ちゃんに優しくしてあげて。こういう場に慣れてないんだから仕方ないわ。おじさまがママと再婚しなければ、あたしたちの世界に足を踏み入れることもなかったんだし」

「だが美月が家族になり、磯山家と繋がりができたのは事実。名字が違うから俺たちと兄妹だと気付かない人もいるが、何かあった時のために慎重に行動してもらわないと。……わかるね？」

「はい、お義兄——」

美月がそう言った瞬間、宗介からじろりと睨まれる。兄妹ごっこをするつもりはないと宣言したのを忘れたのかと言わんばかりだ。

「そ、宗介さん」

言い直すと、愛菜はにやりと口角を上げ、宗介は満足げに頷いた。二人はそれ以上何も言わずに背を向け、さっさと去っていく。

一人になると、美月の視界はみるうちにボヤけ始めた。

今は泣いてはダメ。父に会った時に理由を訊かれてもしたら、何も答えられない！

零れそうになる涙を指の腹で拭った美月は、俯いたまま早足で出入り口へ向かう。

誰の目にも留まらないよう乱れた髪を手で隠し、シャンパングラスを持つ指に力を込めた。

あっ、グラスを返却しないと——と、慌てて方向転換する。でも、それがいけなかった。不意に現れた男性に気付かず、勢いよくその人にぶつかってしまったのだ。

「きゃあっ！」

グラスの中のシャンパンが勢いよく撥ね、男性の胸元にかかる。

その失態に、美月の顔から一瞬にして血の気が引いていった。

「す、すみません！　すぐに……痛っ！」

慌てて離れようとするものの、頭皮に痛みが走って止まる。先ほど愛菜に乱された髪が、男性の襟に留められた記章に絡まっていた。とんでもない失態続きに、羞恥で美月の頬がカーツと上気し

ていく。  
「嘘、どうしよう……」  
焦れば焦るほど髪の毛は絡まり、時間だけが過ぎていく。同時に男性のスーツの染みも広がっていった。申し訳なさと自分への苛立ちがまざり合い、美月の感情はもうぐちゃぐちゃだ。  
「すみません、本当にすみません」  
「大丈夫だよ。落ち着いて」  
謝ることしかできない美月の腰に、男性が腕を回してきた。  
突然の出来事に、美月は大きく息を呑む。こんな風に男性と接触した経験がないせいで、どう対応すればいいのかわからない。

パニックになった美月に、男性は気付かない。慣れた仕事で彼女のグラスを取り上げた。  
「あっ！」

驚きのあまり声を上げると、男性が美月を安心させるように微笑んだ。

「こういう時は、一つずつ解決していけばいいんだよ。俺に触れられて気まずいかもしれないけど、君の髪を引きちぎってしまわないためにも、少し協力してくれるかな？」

「あ、はい……」

「ここだと皆の注目を浴びてしまう、壁際に寄ろう。さあ、体重をかけていいから俺に合わせて歩こう」

互いの距離が離れないよう、男性は美月の腰をしつかり抱いたまま歩き出す。その近さに緊張感

が極限まで高まったが、なんとか無事に壁際までたどり着けた。

ホツとしたのも束の間、今度は男性が美月の頭を掻き抱き自分の胸元へ引き寄せる。先ほどよりも一段と濃厚な密着に、美月の心臓が早鐘を打ち始めた。

「このままでいて。髪の毛が緩んでいる方が、記章を外しやすいから……と、よし、取れた！」  
取れたと聞いて、美月は男性の胸を押し距離を取ろうとしたが、途中でぴたりと止める。手のひらに伝わる濡れたシャツの感触で、現実引き戻されたからだ。

このようなパーティで粗相をしてしまった場合、どういう振る舞いをするのが正しいのか、見当もつかない。しかし美月は、考えるよりも先に動き出していた。クラッチバッグからハンカチを取り出して、スーツに染み付いたシヤンパンを拭く。

「わたし……本当にすみませんでした」

「君はずっと謝っているね。俺は気にしてないよ。それに俺もぼんやりしてて悪かったし。だけど、そうやって心配してもらえるのは嬉しいな。とはいえ、君に恐縮させてばかりでは申し訳ないから、これ以上謝らないでほしい。いいね。君の謝罪はもう受け入れたんだ」

「……はい」

美月が素直に返事をする、男性はふつと笑い、ハンカチを持つ彼女の手に触れた。

「借りるね」

かすかに震える美月の手からハンカチを取った男性は、自分でシャツの染みを軽く拭き始める。

「ところで、君はどういう事情でこのパーティに？ 社会人には……見えないけど」

マナーがなっていないと暗に咎められた気がして、美月は口籠もってしまう。でも、これ以上失礼な真似をしたくない。勇気を出して、背の高い男性を仰ぎ見た。

「おっしゃるとおり、わたしはまだ大学生です。でも、今春には卒業して社会人になります」

「大学四年か……。じゃ、今が一番楽しい時だね。いや、卒論の時期と重なって忙しいのかな」

男性は目を細めて、まるで美月が後輩であるかのように優しく接してきた。

この時、美月は初めて男性の顔をまじまじと眺めた。  
宗介と同じく背が高く、顔立ちも整っている。ただ義兄と違い、彼は男性としての支配力を前面に出すタイプではなく、恋愛映画などで主役を務める俳優に似た爽やかさがあつた。

綺麗な目元、真つすぐな鼻梁、そして相手に柔らかな印象を与える唇。どれをとつても、本当に素敵な男性だ。

パーティという場所柄か、整髪料で後ろに撫で付けている髪形はやや威圧的に見えなくもない。だが、有り余る色気がそれを打ち消していた。

次の瞬間、男性と視線が絡まった。ぶしつけに彼を観察してしまった自分が恥ずかしくなり、美月はそつと俯く。

「えっと……はい。でも今は、卒業が待ち遠しいです。早く実家から立ちたいので」

「しっかりしてるんだね。学生の君がこのパーティに出席してるのは、磯山グループに就職が決まっている……ということ？」

「いいえ。わたしが招待されたのは、磯山グループで働く父が——」

と、そこまで答えた時、誰かに呼ばれたのか、目の前の男性が急に後ろを振り返った。美月がつけられるように意識を向けると、彼の肩越しにこちらを不機嫌そうに注視する義兄と目が合う。かなり距離があるにもかかわらず、未だに会場に残っている美月をよく思っていないのがひしひしと伝わってきた。

「今、行く！ あつ、君は——」

知り合いに返事をした男性が、すぐに美月に意識を戻して何かを言いかける。だが、美月はそれを遮るように一歩下がりが、彼と距離を取った。

「どうぞ行ってください。あの、お話ができて楽しかったです。……失礼します」  
会釈すると、美月は小走りですぐ男性の横を通り過ぎる。

「待って、君！」

男性の呼びかけにも振り返らず、美月はパーティ会場を出て化粧室に飛び込んだ。そこで鏡に映る無様な自分の姿を見るなり、思わず手で顔を覆う。

義妹に乱された髪が酷い有様になっている。こんな姿であの素敵な男性の前に立っていたかと思うと、恥ずかしくて堪らなかつた。

美月は、愛菜のようにその場に佇んでいただけで男性を魅了できるほど美しい容姿ではない。義兄妹となった二人とは比べものにならないほど平凡な外見は、誰の目にも留まらない。特に今日のパーティでは、それが如実に顕れていた。なのに、あの男性はそんな美月に最後まで親切にしてくれたのだ。

「あんなに素敵な人とは、もう二度と出会えないよね……」

少し寂しさは覚えるが、それが美月の人生。今の自分を受け入れて前に進まなければ……

美月は落ち込みかけた気持ちを奮い立たせ、ピンを使って乱れた髪を整えた。

再びパーティ会場へ戻ると、早速宗介に見つかり説教が始まる。解放されたそのあとも、美月はずっと一人で過ごした。予想したとおり、あの男性と再び会うことはなかつた。

\*\*\*

——数週間後。

「あつ、雪……」

宮本誠一建築事務所でアルバイト中の美月の視界に、ちらちらと舞う小雪が映る。

今日は冷え込みが強い。午後には雨が雪に変わるかもしれないという天気予報は見事的中したようだ。しかも近々大寒波が日本列島を覆うとかで、全国各地で大雪になる恐れがあるらしい。

先日も大雪で交通網が麻痺したのに、来週もまた雪で大変なことになるのだろうか。

美月は作業の手を止め、立ち上がって窓際に近寄った。

「良かった、積もる雪じゃなさそう」

地面に落ちた雪が間を置かずに溶けていく。その光景に安心した美月は、再びデスクに戻って作業を始めた。

美月は、大学入学時から、ここでアルバイトをしている。

最初は主に事務作業の補助を行っていたが、しばらくして所長の宮本から建築模型の製作に携わってみたいかと誘われた。挑戦してみると、たちまちその魅力に取り憑かれ、建築模型士の資格を取得。卒業後は、正式に入所することが決まっている。

工房に籠もっての作業がほとんどのため、多少は孤独を感じなくもないが、美月に不満はなかった。クライアントの喜ぶ姿を見られるように、全力を尽くすだけだ。

「さあ、午後も頑張らないとね！ 岩城さんもそろそろ出先から戻ってくるし」

建築模型士の岩城に指示された作業に戻った時、ドアをノックする音が聞こえた。

「芦名さん、ちよつといいかな？」

ドアの傍には、所長の宮本が立っていた。外を指でさす彼に、美月は即座に「はい」と返事をし、工房を出る。そして彼のあとに続き、所長室へ入った。

「今の進捗はどうなってる？」

「岩城さんが作成されたスケジュールどおりに進んでいます」

美月は普段と変わらない態度を装いつつも、実際は宮本の動きに戸惑っていた。彼が美月を見もせずにキャビネットから分厚いファイルを取り出し、それを旅行バッグに詰めていくからだ。

「そうか。それなら芦名さんに頼んでも大丈夫かな。バイトとはいえ働いて四年だし、君はもううちの即戦力になれる」

「あの、おっしゃってる意味が——」

「ああ、悪かった」

くるつと振り返り、ようやく美月を見た宮本が決まり悪そうに苦笑した。

「小野塚氏の家に行つて、私が指定する資料をまとめてきてくれないかな？」

「えっ？ 小野塚氏って……あの、世界で活躍されている有名建築家の？」

「そうだよ、私が尊敬する建築家の一人だ」

建築事務所に勤める者なら誰でも知っている名前に、言葉を失う。すると、そうなるのもわかると言いたげに、宮本は何度も頷いた。

「小野塚氏は、自宅に貴重な書物を所蔵している。今度のコンペで参考にしたいと思って、それを見せてもらえないかと打診していたんだ。それで無理を言つて七日間予定を空けてもらったのに、私にどうしても外せない出張が入ってしまった」

これから出発するのか、先ほどファイルを詰めた旅行バッグとスーツケースを宮本は身振りで示す。

確かに出張では仕方がない。だが、資料作成も大事な仕事だ。日程をずらしてでも、宮本が自分で取り組むのがいいのではないだろうか。

「所長が出張から戻ってきてから伺うのでは、ダメなんですか？」

「それも考えたよ。だけど私が戻る頃には、小野塚氏は海外出張で日本を離れている。都合がつくのは今しかないんだ。それで芦名さんに声をかけさせてもらった」

宮本はデスクの上にある封筒を取り、美月に差し出す。

「調べてほしい内容はリストにまとめてある。自分用に書き記したものが、芦名さんにもわかると思う。どう？　引き受けてくれるかな？」

美月は封筒を受け取りつつも、やはり正式な所員でもない自分が行っていいものなのかと不安に襲われた。そんな迷いを感じ取ったのか、宮本が美月を安心させるように頬を緩める。

「今回の仕事は大変かもしれない。でも、きっとそれだけではないから安心して」

「どういう意味ですか？」

「小野塚氏が今まで手がけた建築物の模型が、彼の家にいくつか置いてある」

「えっ？　模型が置いてあるんですか!？」

目を輝かせる美月に、宮本がぶつと噴き出した。あまりにも美月の食いつきが良かったからだろう。

肩を揺らして笑う宮本は、恥ずかしさで縮こまる美月を見て、少しずつ笑い声を収めた。

「小野塚氏には私から、うちの建築模型士が代わりに何う旨むねを知らせておく。休憩時間を利用して模型を見せてもらうといい。きっと芦名さんのためにもなる」

「ありがとうございます！　では、所長のお役に立てるよう頑張ってきます！」

美月が応じると、宮本は詳細なスケジュールを話してくれた。

明日から土日を除いた七日間、美月は小野塚邸へ通う。時間は十三時から十八時まで。小野塚が不在にしても、夫人が家政婦は必ずいるので気にせず訪れていいとのことだった。

「芦名さんは、現在週四でバイトに入ってくれてるけど、その日以外も出てこれるそう？　単位や

卒論は大丈夫？」

「はい、大丈夫です。何かあっても、午後には小野塚邸に向かいます」

「よし、それならしっかり調べてきてくれ。よろしく頼む」

宮本はそう言うと、用意したバッグを手にした。美月は先回りしてドアを開け、彼と一緒に事務所の外へ出る。

「じゃ、行ってくる。芦名さんも頑張ってきて」

美月が頷くのを見てから、宮本は待たせていたタクシーに乗り込んだ。

その後、美月は工房に戻り、宮本から受け取った封筒を開ける。中に入っていた書類に目を通すと、どの資料を探せばいいのか箇条書きされており、何をまとめたのかという目的も細分化してあった。

この業界にまだそこまで詳しくない美月でも、宮本の求める内容が手に取るようにわかる。自分なりに頑張ってみようと覚悟を決め、美月は再び岩城に任された仕事に戻った。

——翌日。

午前中は大学に顔を出したが、午後は小野塚邸へ赴くため早々に出た。電車とバスを乗り継ぎ、高台の新興住宅地にある停留所で降りる。

肌を刺す冷たい風に、美月は身震いした。マフラーをきつく巻いても、寒さからは逃れられない。手袋をしていない手を擦り合わせたり吐息で温めたりしながら、周囲を見回した。

先日の大雪の名残が、道路の隅や街路樹の根元に見える。日陰だからなのかもしれないが、都心はここまで雪が残っていない。溶けずに硬い氷となっているのは、この気温が都心よりも低いせいだろう。

「これからは、もう少し着込まないと」

風邪を引いて寝込みでもしたら、義兄や義妹に何を言われるか……

義兄妹間で波風を立てずに過ごすには、美月が彼らから叱責されないようにすることが大事だ。それを再び自分に言い聞かせ、美月は携帯の地図で確認しながら坂を上がり、立派な門構えの前で止まった。

「……ここなの!？」

明治時代の洋館を彷彿とさせる大きな邸宅に、美月は圧倒されてしまう。

美月が現在家族と住んでいる、磯山グループの社長が用意してくれた家も充分大きいのが、目の前の邸宅はそれ以上だ。

気圧されそうになりつつも、美月は勇気を出してインターホンを押した。

『はい』

「宮本誠一建築事務所から来ました、芦名と申します。小野塚さまとお約束をさせていただいておりますが、ご在宅でしょうか」

『伺っております。どうぞ中へお進みください』

自動で門が開いたので、美月は敷地に入り階段を上がった。目の前に広がる手入れの行き届いた

庭園も素敵だが、それよりも両翼を広げたような形の豪壮な邸宅に目が吸い寄せられる。

その時、玄関のドアが開いた。

我に戻った美月は背筋を伸ばし、小走りでそちらへ向かう。五十代ぐらの恰幅のよい女性が、美月を見るなり穏やかな笑みを浮かべた。

「私は家政婦の岡島と申します。旦那さまは書齋にいらっしゃいますので、ご案内いたしますね」

「芦名です。どうぞよろしくお願いいたします」  
岡島に続いて屋敷に足を踏み入れる。外観に似合う洋風の内装に、美月はまたも目が釘付けになる。

床には幾何学模様の色鮮やかな絨毯が敷かれ、玄関には細かな彫り細工が施された花瓶が置かれ、大輪の薔薇が生けられている。ゴブラン織りの生地で作られた豪華な椅子も置いてあった。

物の価値がわからない美月にも、そこにある全ての品が高価だろうことは理解できる。

絨毯に足を引っかけないようにしなければ……

美月は緊張の面持ちでブーツを脱ぎ、自由に使っていると言われたワードローブにコートとマフラーを掛けた。

「書齋はこちら側の棟でございます」

岡島がとあるドアの前で足を止めると、美月もそれにならった。

「旦那さま、宮本誠一建築事務所より芦名さまがいらっしゃいました」

「お通しして」

岡島がドアを開け、どうぞと手振りで室内を示す。美月は彼女に会釈して、書齋に足を踏み入れた。

「はじめまして、芦名と申します。宮本の代わりに、こちらに通わせていただきます」

「ああ、聞いているよ」

書齋のデスクの横に立ち、何かの本を手にしている人物こそ、世界で活躍する有名建築家の小野塚だ。年齢は六十代に入ったばかりだと聞いているが、スラックスにセーターというラフな格好で、五十代の宮本より年下に見える。彼と違って髪の毛が黒々としており、肌艶もいい。精神的に海外へ赴いて仕事をしているのが若さの秘訣なのだろうか。

そんなことを考えながら小野塚を見つめる美月に、彼はおかしそうにクスツと笑った。

あれ？ この笑い方、どこかで見た気が……

記憶を探るようにほんの少し小首を傾げている間に、小野塚が手の中の本を閉じてデスクに置いた。

「宮本くんは、面白そうな子を雇っているんだね」

「えっ？」

「この業界では、何事にも物怖じせず、鋭い観察眼を持った子が役に立つ。ほんの些細なミスも許されないからね。だが——」

小野塚は数歩美月に近づくと、彼女の頭のとっぺんから爪先までをまじまじと眺めた。そして残念そうに顔をしかめる。

「芦名さんは、もっと本当の自分を前面に出した方がいいね。どこか抑圧された雰囲気を身に纏っている。周囲に迷惑をかけるぐらいなら、自分が我慢すればいい……とか思っていない？」

小野塚の言葉に、美月はドキツとした。心当たりは特にないのには、核心を突かれた気がしたためだ。

思わず身構えた時、小野塚がふっと頬を緩めた。

「悪いね。仕事柄、相手の性格や感情を見極めようとする癖がついてしまって。でもそのお陰で、誰でも実のある議論ができるんだと思う。私はね、自分と関わる人にもそうあってほしいんだ。だから芦名さんも、私と話す時は遠慮なく感情をぶつけてくれていいんだからね」

小野塚がどこに話を持っていくかとしているのか、よくわからない。けれど彼の柔らかい物腰に、美月の軀からも自然と力が抜けていった。

美月は改めて小野塚に頭を下げる。

「これからどうぞよろしくお願いたします」

「うん、楽しくやっついていこうね。さてと、宮本くんから受け取った書類を見せてくれる？」

美月はバッグからファイルを取り出し、調べる資料が簡条書きにされた用紙を手渡す。小野塚はそれに目を走らせると「なるほどね」と吹き、用紙を美月に返した。

「見たところ、必要なものは隣室の書庫と書齋のキャビネットにある。おいで、案内しよう」

小野塚は、隣室に続くドアの前でセキュリティパネルを操作する。

「ここを開けられるのは家族だけなんだ。私がない時は、妻に解除を頼んでほしい。でも妻も

仕事をしているから、いない日もあると思う。だから書庫には、なるべく私がいる時に入つてほしい」

「わかりました」

書庫では、目当ての蔵書がどのあたりにあるのか、だいたいの位置を教えてもらった。まず一冊見つけ、それを手にして書齋に戻る。

するとそこには、岡島の他に、四十代ぐらいのとても素敵な女性がいた。彼女は小野塚を見るなり艶然とした面持ちで彼に近寄る。彼もまた笑顔で両腕を広げて、女性を迎え入れた。

「ああ、帰っていたんだね。芦名さん、彼女は私の妻だ。都内でネイルサロンを経営している」

こんな若い人が奥さま？ しかも会社の経営者?!

目の前に立つすらりとした女性は、ロング丈のニットワンピースに真珠のネックレスを身に着け、髪を緩やかにアップにしていた。

洗練された仕草の女性を眺める美月に、小野塚夫人が優しげに微笑んだ。

「はじめまして。あなたが芦名さんなのね。女性が来ると聞いて、楽しみにしていたの!」

「おいおい、芦名さんは遊びに来たんじゃないんだよ。仕事で来たんだ」

「わかつてるわ。でも、この家に若い子が来てくれて嬉しいの。息子たちは全員独り立ちしちゃって、まったく家に寄りつかないし」

「私は妻と二人だけの生活に満足しているのに、君は違うのかい?」

目の前で繰り広げられる仲睦まじいやり取りに面食らっていると、岡島が美月に顔を寄せ、そっ

と「お二人は海外で過ごされることが多いので、あまり人目を気にされません。慣れてくださいね」と耳打ちしてきた。

美月が素敵な夫婦の姿を見つめながら頷いた時、小野塚が岡島の名を呼んだ。

「芦名さんが集中して作業できるように、理人が使っていた書齋に案内してあげてくれないかな。

芦名さん、そこで自由に仕事してくれ。何かあったら岡島さんに言ってくればいい。彼女は君の望みどおりに動いてくれるだろう。あと……私の書齋にはいつでも入ってきていいからね」

「ありがとうございます」

「では、ご案内いたしますね」

美月に声をかけた岡島は笑いを堪えきれない様子で、手で口元を隠している。

その後、書齋から少し離れたところで、ようやく岡島が口を開いた。

「お二人は本当に仲がよろしいんです。もうこちらが赤面してしまうぐらいの仲の良さで……。ああいふ風にわたしたちを追い出されたのは、まあ、いろいろとね」

岡島が濁した言葉で、これから室内で何が起ころのかを想像した美月は真っ赤になったが、それを上回る勢いで羨望が生まれる。

「年齢を重ねた今でも愛し愛される関係って、とても素晴らしいですね。わたしにはそういう特別な人がいないので」

「芦名さんはまだ大学生でしょう? 大丈夫、これから素敵な人と出会えますよ。あつ、こちらです」

ドアを開ける岡島に続いて室内に入った。

小野塚の書斎と同じく大きなデスクと座り心地の良さそうな椅子、そして製図用に特化されたドラフターがあった。

「こちらは、長男の理人さまの書斎です。既に家を出られていますので、今はどなたも使っておりません。ご自由にお過ごしください。では、のちほどまた伺います」

岡島が出ていくと、美月はホッと息をついて部屋を見回す。

誰も使っていないという割に、室内はとても綺麗だ。建築関係の本が詰まったキャビネットとデスクに指を滑らせるが、埃はない。

「息子さんがいつ帰ってきてもいいように、きちんと掃除されているのね」

家族を大事にしていることが伝わってくる。

「本当に羨ましいな……」

美月は自分の家族と比較してしまい、物悲しい気分になった。しかし、頭を振ってそれを吹き飛ばし、椅子に腰を下ろす。

資料をまとめられるのは七日間しかない。集中して取り組まなければ、宮本の期待を裏切る結果になる。それだけは絶対にしたくない。

気持ちを切り換えた美月は、リストにある書物を探したり、建物の図面をカメラで撮ったりしていく。

勝手が違うので、小野塚邸での仕事は大変だった。そんな美月をリラックスさせようと思ったの

か、休憩時間には小野塚が顔を出し、世界各地の建築物の話をしてくれる。それはとても興味深く、美月は熱心に聞き入った。

別の日には、小野塚夫人や岡島と女子トークを繰り広げ、盛り上がりもした。そうして小野塚邸に通うのも四日目になると、美月の足取りは自然と軽くなっていた。

「今日もよろしくお願います」

美月は明らかに挨拶するが、この日に限って岡島が申し訳なさそうな表情を浮かべる。

「芦名さま、実は旦那さまは急用で外出しております。ですが、奥さまはいらっしゃいますので、いつもどおり書斎を使ってほしいとのことでした」

「ありがとうございます」

美月は笑顔で返事をして、書斎へ向かおうとする。その時、ちょうど小野塚夫人が階段を駆け下りてきたので足を止める。

「芦名さん、いらっしゃい！あのね、私これから会社に行かなければならないの。悪いんだけど、書庫にある本が必要なら、今出してもらえるかな？」

「あっ、はい。わかりました！」

美月は小野塚夫人と一緒に書庫へ行き、今日取り組もうと考えていた本を手にする。

「芦名さんが帰宅するまでには戻るつもりよ。でも、もし間に合わなかったら、それは岡島さんに渡してくれる？」

「わかりました」

「わかりました」

そうして小野塚夫人は「じゃ、行ってくるわ!」と元氣よく手を振り、急いで出ていった。美月は書齋へ行き、作業に取りかかる。しかし、明治時代の建物についてまとめられた本を目にした途端、仕事そっちのけで読み耽<sup>ふけ</sup>つてしまった。

次のコンペでは、この路線でいきたいという宮本の胸の内がとてもわかる。

いつの日か、わたしも西洋の建物の模型に取り組んでみたいな——そんなことを思っていると、不意に宮本から聞いた話が美月の頭を過<sup>よ</sup>った。

小野塚邸には、小野塚が設計した建築物の模型があるということを……

「この仕事が終わったら見せてください、って頼まないと。うん!」

美月は気合を入れ直して、仕事に戻る。

途中、岡島から小野塚夫人の忘れ物を届けに行くとき声をかけられた。美月だけになった洋館内は静まり返り、空調の音とキーボードを打つ音のみが響く。

「うーん!」

一時間ほど経った頃、一息入れようと岡島が用意してくれたコーヒーに手を伸ばした。しかし、気がかない間に飲み干していたようだ。カップだけでなく小さなポットも空<sup>から</sup>っぽになっている。

岡島は不在だが、キッチンにはいつでも入つていいと言われていたため、美月はポットを掴んで廊下に出た。

その時、窓の向こう側で何か黒いものが動いたのが目の端に映る。何気なく顔を向けると、そこにはアプローチを歩く黒ずくめの男性がいた。

男性はダウンジャケットにジーンズというラフな格好で、どう見てもセールスマンには見えない。

もしかして、泥棒!?

そう思った瞬間、恐怖で美月の軀<sup>からだ</sup>が凍り付く。

今、小野塚邸にいるのは美月だけ。即座に書齋に取つて返し、携帯から警察に連絡するべきだと思つたが、恐ろしさのせいで足がまったく動かない。

そうしている間に、玄関のドアが開く。

「……っ!」

美月は声にならない悲鳴を呑み込み、身を隠すようにしゃがみ込んだ。耳を澄ますと、足音が近づいてくるのがわかる。

ひよっとして小野塚が所蔵している貴重な本が目当てなのだろうか。

「ま、守らないと……!」

美月は武器にならなそうな小さなポットを置いて立ち上がり、数歩離れたコンソールテーブルにある重たそうな花瓶を両手で持った。

徐々に大きくなる足音に合わせて、心音が耳元で鳴り響く。恐怖に我を忘れそうになるが、それを必死に耐えて廊下の曲がり角に身を隠した。

緊迫した状況に、美月の息遣いが浅くなってしまふ。その呼吸音が泥棒に聞こえやしないかと不安に駆られて、今度は息が詰まりそうになる。

ああ、こんなの耐えない!

下肢がわなわなと震え、花瓶の水がぴちゃぴちゃと揺れ始めた頃、衣服の擦れる音が響いてきた。泥棒が近くまでできたのだ。

呼吸が止まりそうになるのを感じたが、美月はそれを無視して花瓶を頭上へ持ち上げる。そしてダウンジャケットが目に入った刹那、一気に振り下ろした。

「うわあああつ!!」

泥棒の悲鳴に、美月の軀に余計な力が入る。それがいけなかった。

花瓶を泥棒の頭に落として相手を気絶させるつもりだったのに、手が離れず、花と水をぶっかける形になってしまったのだ。

「あつ……」

作戦が見事に失敗し、愕然となる。ずぶ濡れの泥棒を見つめる美月の手から力が抜け、花瓶が絨毯の上に転がった。

美月は唇を震わせて、花や水を乱暴に拭う相手を凝視する。しかしすぐに我に返り、身を翻して走り出した。

「おい、待て!」

泥棒に呼びかけられるが、美月はそれを無視し、何度も転びそうになりながら書斎に飛び込む。

素早く鍵をかけようとしたところで、ドアを強く押された。

「きやああ!」

後ろに倒れて尻餅をついた美月は、泥棒から身を守るものがないかと周囲を見回す。でも、何も

ない。

どうしよう、どうしよう!

焦りで歯がちがちとぶつかる。舌に広がる血の味で唇を切ったのがわかったが、構っている余裕はない。美月はとにかく逃げなければと思った。なのに恐怖で軀を動かせない。自分の弱さが悔しくて、瞼の裏が熱くなる。

堪らず手を握り締めた時、突然泥棒が目の前に片膝をついた。

何かされると想像した美月は、ぎゅっと硬く目を瞑ってしまう。

「君……、もしかしてあのパーティにいた子?」

えっ? 今の声って……

聞き覚えのある声音に、美月の心臓が痛いほど打った。同時に胸に火が灯り、温かいものが広がっていく。先ほどとはまた違う胸の高鳴りを覚えながら、美月はゆっくり顔を上げた。

そこにいたのは、磯山グループのパーティで出会ったあの男性だった。

「ど、どうして……あなたが?」

「それはこっちの台詞だよ。どうして君が俺の実家に?」

「実家? ……あの、泥棒じゃ?」

美月がそう言った途端、男性がふっと噴き出した。こんなに楽しい間違いは初めてだと言わんばかりに笑い、濡れた髪を手で掻き上げる。

「自分の家に帰ってきて、泥棒に間違われるとは思ってもみなかった。そうか、俺たちは自己紹介

がまだだったね。あの日、きちんと名乗り合っていたらこんな再会にならずに済んだのに」

男性はジーンズの後ろポケットから財布を取り出すと、美月の目の前に免許証を差し出した。

「俺は小野塚理人、二十九歳。父の事務所で一級建築士として働いている。あのパーティは、父の代理で出席していたんだ」

「小野塚さんの息子さん？」

免許証に「小野塚理人」と書いてあるのを見て、ようやく納得がいった。彼は泥棒ではなく小野塚の息子だから、簡単に家に入ってこれたのだ。

「……君は？ 大学生なのは知っているけど」

数週間前にほんの少し会話を交わしただけなのに、自分を覚えてくれていたなんて……

泣きたくなるほどの嬉しさが胸に広がっていく。それを必死に堪えて、美月は免許証から顔を上げた。

「あの……わたしは、芦名美月と申します。宮本誠一建築事務所でバイトをしているんですが、今は宮本の代わりにこちらに毎日通って、必要なデータを取らせていただいています」

「なるほど。それで俺の実家にいるんだね。でも、毎日？ そんなにバイトをしていたら、彼氏が怒らない？」

美月は頭を振って否定し、自嘲するように笑った。

「そういう人はいません。今まで男性に、特別な感情を抱いたことがなくて。それに——」

父と二人暮らしをしていた時は、美月が家事全般を担っていたため忙しかった。今は義兄妹の不

興を買わないよう過ごすのに必死だ。

そんな状況下で、男性に対して特別な気持ちを抱く余裕などない。

そう思っていたのに、理人は違う。たった一回しか会っていないのに、彼を見ただけでこれまで感じたことのない想いが湧き起こってくる。胸の奥がむずむずするほどだ。

それは疼きになり、下腹部の深奥へと伝染していった。そこに熱が集中して妙な気怠さすら覚える。なのに、何故かもつと感じていたいという衝動に駆られた。

これはいったいどういう感情なのだろうか。

美月は呼吸のリズムが少し速くなっていることに気付かないまま、柔らかな表情でこちらを窺う理人を見つめた。

「そうなの？ 俺は芦名さんが気になっっていたのに。もちろん、今日の出会いにも心を惹かれてるけどね。俺たち、深い縁があるのかな。一度目はシャンパンをかけられ、二度目は花瓶の花と水をぶっかけられた」

「あっ！」

どうして忘れていたのだろう。理人はびしょ濡れになっているというのに……

「すみません！ 本当に！」

バッグに入っているタオルを取ろうと腰を浮かしたところで、理人が美月の腕を掴んだ。

「あの日は髪の毛をアップにしていたからわからなかったけど、こんなにも長かったんだね。巻いた髪が女性らしくて、芦名さんに似合っている」

美月の長い髪を見て、理人が頬を緩める。かと思えば、今度は彼の目線が美月の唇に移動する。そして顎を指で掴んだ。

「小野塚さん？ あ、あの——」

「俺が怖がらせてしまったせいだ」

そう言った次の瞬間、唇に理人の指が触れた。突然のことに美月は目を見張るが、彼は気にせず指を動かし始める。

「唇が傷ついている。俺が原因で……」

思わず美月は唇を舐めた。もう血の味はしない。

「大丈夫です。血は止まっているので……あの、小野塚さん？」

美月の呼びかけに、理人が息を長く吐き出した。そして上目遣いで美月と視線を合わせる。

「芦名さんが心配だよ。今のは無意識なものだとわかっているのに、君から目が離せない。庇護欲をくすぐられる」

「あ、あの……？」

肌にとわりつくようなしっとりとした口調に、美月の呼吸はどんどん浅くなる。血がゆっくりと沸き立ち、胸の奥が熱くなっていくのを止められない。

「どうしてかな。芦名さんと初めて会った時も感じたけど、今はあの日以上に、君に——」

理人が何かを告げようとした瞬間、彼の背後で大きな物音がした。そちらへ目を向けると、口を手で覆った岡島が、目を丸くして美月たちを見つめている。

「理人さま、何をされているんです!? その方は、ど、泥棒ではありませんよ！ 彼女はお仕事で旦那さまのもとに通われている、芦名さんです！」

岡島の悲鳴に似たかすれ声が書齋に響き渡る。すると、理人が笑いながら美月の手を取って立ち上がった。

「わかってるよ。どちらかというと、俺が泥棒と間違われてこのザマなんだけどね」

理人の濡れた髪とダウンジャケットに気付いた岡島が、口をあんぐりと開ける。

「俺は上を着替えてくる。岡島さんは、芦名さんと俺のお茶をここに持ってきてくれるかな？」

「承りました」

そうして書齋を出ていく理人と入れ替わりに、岡島が駆け寄ってくる。

「あの本当に大丈夫でしたか？ 理人さまがご迷惑をおかけしませんでしたか？」

「はい。むしろわたしが彼を泥棒と間違えて、失礼な態度を取ってしまったって……。実は、花瓶の身をかけてしまったんです。……あつ、廊下が汚れたままに！」

「気になさらないでください。あとで私が片付けておきます。では、お茶を淹れてきますね」

岡島は慌てふためく美月を安心させるように表情を和らげたあと、退出した。

書齋に一人になるなり、美月は化粧ポーチから鏡を取り出して唇を確認した。

血は止まっているが、まるで虫に噛まれたみたいにくっくると膨らんでいる。

腫れた唇にそっと触れると、理人にそこを優しく撫でられた感触が甦った。彼の指を思い出すだけで、軀の芯が熱くなり、焦げるような疼きが生まれる。

堪らず視線を上げた美月は、鏡に映った自分の顔を見て啞然とした。

「何、この表情……」

そこには、これまでに見たことのない自分がいた。瞳は潤んで輝き、頬は蔷薇色に染まっている。美月は手の甲で口元を覆い、自らの変化を感じながら瞼を閉じた。

それからしばらくして、岡島がコーヒーと軽食を手にして書齋に戻ってくる。そのタイミングを見計らったかのように、理人もドアを軽くノックして入ってきた。

新しい服に着替えて髪をワックスで整えた理人が、美月に微笑みかける。

これが普段の姿に違いない。パーティの際にしていた髪型も、大人の色気があって素敵だったけれど、今はその時とは違って親しみやすい雰囲気だ漂っている。

春の陽だまりみたいに温かい……

「岡島さん、ありがとう」

「いいえ。ところで理人さま。芦名さんはお仕事で来られているんです。それをお忘れにならないでください」

「わかってるよ。さあ、出て行って」

岡島はドアを開けたまま書齋をあとにした。

二人きりになると、美月は理人に促されてソファに座った。

「岡島さん、芦名さんのことが好きなんだね。君を俺から守ろうとして、仕事だって念を押してくるんだから」

岡島の気遣いを思い出して、自然と美月の頬が緩んだ。それを隠すように、コーヒーカップを口元へ持ち上げる。

「そうでしょうか。わたしを守るといふより、むしろわたしが小野塚さんの優しさを勘違いしないか心配しているんだと思います。わたしが男性に慣れていないのを、岡島さんも知っていますから。あつ、安心してくださいね。間違っても自分のいいように解釈はしません」

「そんな風に、最初から決めつけないでほしいな」

「はい??」

訊き返す美月に、理人はなんでもないと肩をすくめた。

「毎日通っていると行っていただけ、いつまで?」

「今日を除くとあと三日伺います。土日は休みなので、来週までです」

理人は意味深に「三日……」と呟いたあと、急に実家に寄った理由を話し始めた。

実家暮らしをしていた頃、理人は美月が使っている書齋でいろいろなアイデアをしたためていたという。その時にまとめたデータを取りに来たかったが、父親が家にいる時は避けていたらしい。なんでも、一旦足を踏み入れると、必ず泊まるように言われて帰してもらえないそうだ。それだけならまだいいが、いつ身を固めるのか、いつ恋人を紹介してくれるのかと、根掘り葉掘り訊いてくるといふ。

「父の望みはわかっている。早く結婚して、一緒に海外に出てほしいんだよ。建築家として仕事に集中してほしいと思ってるんだ。でも俺はまだやるべきことがある。そうそう、海外と言えは——」

続いて、父親の海外出張に付いていった話を始めた。

興味深い海外の建築事情を聞きながら、楽しい時間を過ごす。それはほんの一時いっしょくただったが、理人の人となりを知り、美月は乾いたスポンジが水を吸うように急速に彼に惹かれていった。帰る際に美月を最寄り駅まで送ってくれた所作も、とてもスマートだ。終始、美月を大人の女性として扱ってくれたことも嬉しい。

自分は男性の目を引く美女でもないのに……

そんな風に見正面から美月と向き合ってくれた理人。でも、もう二度と会えないだろう。今日で二人の接点はなくなり、これでお別れになる。

そう意識した途端、美月の胸に再び悩ましい気持ち湧き起こった。それは週末になっても心に留まり、週明け小野塚邸へ向かう間もずっと渦巻うずまいていた。

——月曜日。

「やあ、こんにちは」

突如聞こえた深い声音に、美月は読んでいた本からさっと顔を上げる。そして、来るはずのない理人がそこにいるのを見て、目を丸くした。

「小野塚さん？ ど、どうして？」

「父が海外出張へ行くだろう？ その事前調整で、父に会いに来たんだ。じゃ、またあとで」  
そう言った理人はにこやかに手を振って、廊下の先にある小野塚の書斎へ向かった。

理人が姿を消すのと同時に美月の心臓が早鐘を打ち始め、一瞬にしてかた身が発火するのではないかと思うほど熱くなる。

「何、これ……。いったい何!？」

美月は高鳴る胸に手を置きながら、理人の姿を追うようにドアを見つめていた。

そのあと、落ち着かない気持ちのまま仕事を進めていると、理人が美月のもとへ戻ってきた。そして、ソファに座り印刷した製図のチェックを始める。

忙しいはずなのに、理人は美月が手を休めると話しかけてきたり、気分を変えるために家の中を案内してくれたりした。

親切にしてくれるのは、小野塚のもとで慣れない仕事をする美月を気遣ってくれているからだろう。しかし、こうも真綿まわたで包むように接せられては、勘違いをしそうになる。

……えっ？ 勘違い？

美月は自分の発想に目をぱちくりさせて、仕事に集中する理人を見つめた。それに気付いた彼が、手元から目を上げる。

「昔名さん？ ……休憩する？」

「あつ、いえ……」

こっそり見ていたのを知られたためか、それとも理人の目が朗すがらかに細められたためか、美月の頬が火照ほてっていく。

美月はそれを隠すように立ち上がり、デスクの上に置いてある本を腕に抱えた。

「本を戻してきます」

理人に断りを入れてから書齋を出ると、小野塚の書齋へ向かう。

美月は出張準備で忙しく動く回る小野塚に会釈し、借りた本をキャビネットに返す。すると、不意に彼が話しかけてきた。

「理人はどういう理由で実家に来たんだろうね」

「小野塚さんが海外出張へ行かれるので、事前調整を行うためと伺ってます」

美月の答えに、小野塚は楽しそうに笑った。

「うん、そう言ってたね。口実が必要なほど必死になる息子を見られるなんて、芦名さんに感謝しなければ。まるで昔の自分を見ているようだ」

「あの、わたしは何もしていませんが……」

「それでいいんだよ」

そう言つて小野塚は急に立ち上がり、美月に「ついておいで」と手招きする。そして奥へ通じる廊下を進み、突き当たりのドアのセキュリティを解除した。

「さあ、入りなさい」

小野塚に促されて室内に入った瞬間、目を見開いた。二十畳以上あるだろう広い室内に建築模型がずらりと飾られてある。あまりの壮観さに、二の句が継げない。

精巧に作られた模型を間近で観察していると、小野塚がライトを点けた。光の射し込み具合から、細部まで計算された設計なのがよくわかる。

「このデザインはね——」

設計の意図を小野塚が一つずつ丁寧に説明してくれた。

「宮本くんは、ここにある模型を芦名さんに見せてあげてほしいと頼まれていたのに、遅くなつてすまなかつたね」

「とんでもないです！ 大切な模型を拝見させてもらえるだけで、本当に嬉しいです！」

「そう言つてもらえて、私も嬉しいよ」

小野塚に微笑み返したあと、美月は目の前の模型へ再び意識を集中した。

そうして時間をかけて見て回り、細かな手作業に何度も感嘆の声を漏らす。そんな美月の隣にいた小野塚が、不意に「芦名さん」と声をかけてきた。

美月は模型から目を離し、上体を起こして彼を見上げる。

「こんな時に悪いんだが……実は、一日早く出張先に向かうことにしたよ。知つてのとおり、明日の夕方から雪が本降りになると予想されている。そうなれば交通網が麻痺するかもしれない。なので申し訳ないが、芦名さんが書庫に入れるのは今日までになる。妻も私に同行するんでね」

美月は少し考え、そして問題ないと頷いた。

「書庫の本を借りるのは、今日で終わると思います。ただ書齋のキャビネットにある本を、あと数冊確認させていただきたいんですが……」

「それなら大丈夫だよ。とはいえ、こういう状況だし、明日は早めに帰りなさい。もし終わらなければ、他の日に改めて来ていいんだから。いいね？」

「お気遣いありがとうございます」

美月がそう言った時、ドアをノックする音がした。開け放たれたドアの横に、理人が立っている。「いつまで経っても戻って来ないから、どこに行つたのかと思つた。ここにいたんだね」

「なんだ？ 芦名さんを私に取られて悔しくなつたのか？」

「どう答えてほしいんですか？ そうだ、と？ それとも、違う……と？」

理人の答えに小野塚が肩を揺らして笑う。そして悪巧みをするような顔つきで、そつと美月との距離を縮めた。

「息子はどう言いたいのかな。私にそれを決めてほしがるなんて、男としてまだまだだね」

「えっと、あの……」

美月は困惑しながら言葉を探すが、小野塚は答えなど求めていないのか、目を細めるばかりだった。

全員で部屋を出ると、小野塚は理人と並んで書齋へ歩き出す。美月はそんな父子のあとに続いた。「芦名さんの邪魔は、もうしないよ。理人がここに寄るのも今日で終わると思うし、私も明日の準備で忙しいからね」

「明日発つことにしたんですね？ ああ、良かった！ その方が所員たちも安心します。気を付けて行ってきてください」

「ああ、あとをよろしく頼む」

小野塚と別れ、理人と一緒に彼の書齋へ戻る。

それ以降、理人は美月に話しかけなかった。代わりに、仕事をする美月を食い入るように見つめる。ソファに凭れて分厚いファイルを開いてはいるものの、彼の視線がそちらに向くことはなかった。

数時間後、ようやく今日の仕事が終わつた。

理人の目が気になつて仕方なかったせいか、かなり神経を使つたのが自分でもわかる。疲労を感じながらデスクの上を片付けていると、そこに小野塚夫人がやつてきた。

「芦名さん、このあと時間は空いているかしら？」

「はい、大丈夫ですが」

「良かった！ あのね、芦名さんと会うのは今日で終わりでしょ？ このまま別れるのは寂しいから、夕食を一緒にどうかと思つて。あつ……理人も暇なら一緒に食べる？」

「俺は、芦名さんを誘うついで？」

小野塚夫人は楽しみに笑い、美月に視線を戻す。

「どうかしら？ 最後の夜を、わたしたちと一緒に過ごせる？」

美月は迷惑ではないだろうかと悩みながら小野塚夫人を窺うものの、彼女は目を輝かせて返事を待っている。理人は母親の物言いに呆れてはいるが、美月の背を押すように頷き、声を出さずに食べよう、と口を動かす。

わたし甘えてもいいのかな？ 図々しいと思われなかな——と迷つたが、美月は二人からの厚意を有り難く受けることにした。

「ありがとうございます。是非ご一緒させてください」

「本当!? ありがとうございます! 今夜は岡島さんも一緒だから、皆で騒ぎましょうね。理人、芦名さんと一緒にダイニングルームに来て。じゃ、あとでね」

小野塚夫人は、まるで少女のようにはしゃいで書斎を出ていった。

「誘いに乗ってくれてありがとうございます。母は本当に芦名さんを気に入ったみたいだ。さあ、ここを片付けたら行こう」

「はい」

美月は理人に返事をしたあと、デスクの書類をまとめてバッグに入れる。そして、父と義母に「仕事先で夕食に誘われたので、今夜は一緒にとれません」と謝りのメールを打った。

「用意はできた?」

「はい」

美月は理人と一緒に、別の棟にあるダイニングルームへ向かった。

ドアを開けた瞬間、目に飛び込んできた光景に驚く。小野塚夫人は、出張シェフを呼んでいたのだ。

「さあ、座って」

勧められて、重厚感のあるダイニングチェアに腰掛ける。それを合図に奥のキッチンから次々と料理が出てきた。握り寿司に、天ぷらや煮物といった和食が並べられていく。

小野塚夫妻の心配りに感激しながら、美月は笑いの絶えない食事を楽しみ、素敵な夜を過ごした。

こんな風に賑やかな夕食をとったのはいつ以来だろうか。

この場がもっと続いてほしいと願わずにはいられなかったが、楽しい時間はあっという間に終わるもの。二十一時を回ったところで、夕食会はお開きになった。

小野塚夫妻と最後の挨拶を交わした美月は、この日も理人の車で最寄り駅まで送ってもらった。「どうもありがとうございます」

「うん……。父が出発するってことは、仕事でうちに来るのは今日で終わりだね」

「今日で? いえ明日も——」

そう言いかけたものの、美月は言葉を呑み込んだ。

小野塚夫妻はいないが、明日も寄らせてもらう予定だ。でも、その件をわざわざ理人に告げる必要はない。

今度こそ、これで会うのは終わり……

それを実感して、胸に痛みが押し寄せてくる。唇を強く引き結んで気持ちを切り換えると、美月はシートベルトを外して理人に向き直った。

「ほんの数日でしたが、いろいろなお話を聞けてとても楽しかったです。たぶん、お目にかかることはもうない——」

そう話していたのに、急に理人が美月の手を取り、安堵したような笑みを浮かべた。思わず目を見張るが、彼は意に介さない。

「芦名さんの仕事はこれで終わった。つまりこの先……表面上の付き合いをしなくてもいいという

ことだ」

「あの、何を言ってる……？」

理人の意図するところがわからず眉をひそめる美月を、彼は真摯な目で見つめてくる。その眼差しを見返すだけで胸の奥がざわつき、呼吸が浅くなっていた。

それが普通ではないと気付いた美月は、慌てて顔を背ける。しかしこちらを向けと言わんばかりに、彼に手を強く握り締められた。

「君はもう俺と顔を合わせる機会はないと思ってるみたいだけど、それは真実ではないと証明してみせるよ」

力強い語気に、美月は理人の真意を探るように窺う。互いの目が合うと、彼はふつと表情を緩めて手を引いた。

「君の家まで送りたいけれど、今日は我慢する。気を付けて帰って」

「……はい」

車外に出た美月は、冷気に軀を縮こまらせながらドアを閉める。直後に理人が窓を開け「じゃ、また」と言っ、車を発進させた。

美月は車のテールランプが見えなくなるまで見送ってから、コートのポケットに手を突っ込み駅に向かった。

今日の理人はどこかおかしかった。とはいえ、いつもどおり優しかったけれど。いや、優しいからこそ、彼の言葉を都合よく解釈したくなる。特に最後の言葉は、また次があるかのような口振り

だった。

「バカ……、何を期待してるの？ 勘違いしてはダメよ」

そう言い聞かせるものの、美月の頭の中を占めるのは理人の吸い込まれそうな双眸と言葉。

そのせいか、いつもなら自宅に向かう足取りは重いのに、この日は弾み、閑静な住宅街に響く足音も軽快になる。

美月の口元はほころび、軀は寒さを感じさせないほど火照っていく。自宅の門扉を開け、タイル張りのアプローチを進み、家のドアを開けた際もまだ笑みが浮かんでいた。

しかし、階段を下りてきた宗介の姿が視界に入ると、その表情が一瞬で凍りつく。

「こんなにも上機嫌な美月を見たのは、初めてだ」

仕事から戻って来たばかりなのだろう。宗介はスリーピーススーツを着ていた。

「母を困らせないでほしいね。美月が今夜の夕食を蹴ったと知って、何かあったのではないかと外に飛び出す勢いだっただ。いいか、こういう勝手な行動は二度とするな。わかったね」

宗介の目に宿る冷酷な光に、美月はふるつと震え上がる。それを隠すように軀の脇で握り拳を作り、従順に頷いた。

宗介に逆らえば、家族の和を乱したくないという父の願いを壊すことになる。それだけは絶対にダメだ。美月が我が儘さえ言わなければ、穏便に済ませられるのだから。

「……これからは気を付けます」

「バイトの件は聞いている。今、どこの家に通っているのかもだ。仕事だから仕方ないと思っていた

が……。いいか、あの家と親しくすることは俺が許さない」  
「えっ？」

宗介なら、美月の動向を簡単に調べられる。だから、アルバイトの件で忠告されても不思議ではない。でもまさか、小野塚夫妻と親しくするのを咎められるとは思ってもみなかった。

「もう一度言う。君は、あの家の者と関わり合いを持つな。いいね？」

どうして関わってはいけないのだろうか。

美月は訊ね返そうとするが、宗介の冷酷な眼差しに射貫かれて口を閉じる。すると彼は苛立たしげに息を吐き出して、さっさと奥へ続く廊下を歩いていった。

「母さん、美月が戻ってきたよ！」

宗介が大声で叫ぶと、リビングルームのドアが勢いよく開いた。とても五十代には見えない綺麗な義母が、美月を見るなり息せき切って玄関ホールに走ってくる

「美月ちゃん！ ああ、良かったわ。帰りが遅かったから心配したのよ！」

「心配かけてすみません」

「さあ、早くお風呂に入って軀を温めていらっしやい。このままだと風邪をひくわ」

美月の冷たい手を握って心配する義母に、頷き返す。

「ありがとうございます。じゃ、二階へ行きますね」

そう言っただけで階段が上がっていく途中、急に肌が粟立つのを感じて恐る恐る振り返る。

そこには美月を冷たい目で睨む宗介がいた。しかし、目が合うなり彼は歩き出し、美月の視界か

ら姿を消す。

美月は顔を強張らせたまま二階へ上がり、自室に入る。

自分だけの空間に安らぎを感じてもいいはずなのに、緊張が解けることはなかった。

——翌日。

どんよりとした鉛雲なまりぐもから細雪こめゆきが降ってくる。まるで美月の気持ちを表したかのような曇天どんてんに、気分が落ち込んでいく。昨日の宗介とのやり取りがしこりとなって、心の奥に残っているせいかもしれない。

「どうして小野塚家の人たちと親しくしてはいけないの？」

いくら考えても腑ふに落ちない。

この先、小野塚夫妻と頻繁に会うことはないが、美月の就職先を考えれば、またどこかで必ず顔を合わせるとわかっているはずだ。

それなのに、何故警告を？

「とにかく今は、宗介さんの言葉を忘れよう」

美月は再び空を見上げる。予報どおり、このままだといずれ本降りになって積もるだろう。

その前に早く仕事を終わらせなければ……

美月は心なしに早歩きで進み、小野塚邸のインターホンを押した。

『はい。……えつ、芦名さん？ 来られたんですか!？』

「こんにちは。まだ雪が積もっていないので、仕事をしようと思ってきました」

『とりあえず、入ってください!』

岡島の声が切れ、セキュリティが解除される。中に入ると、彼女が玄関ドアを開けて美月を待たせてくれた。

「どうして来たんですか。天気予報をご覧になっていないんですか!？」

美月を家の中に引つ張り入れた岡島が、コートについた雪を手で払い落とす。

「この天気なら二、三時間は大丈夫かなと思って。あつ、小野塚さんはご存知です」

岡島は納得できないと言いたいのか顔をしかめている。しかし、美月がブーツを脱ぐのを見て、諦めに似たため息を吐いた。

「芦名さんも、お仕事に忠実なんですね。わたしも旦那さまに今日は早めに帰宅するようにと言われたんですけれど、まだ残っているんですから」

「わたしたち、仕事熱心ですね」

美月は岡島と微笑み合って、一緒に小野塚の書斎へ向かう。必要な本を三冊取ると、いつもの部屋に入った。

「芦名さんは、このあたりで雪が降ったらどうなるかご存知ないでしょうからお伝えしておきますが、都心とは違って大変なことになるんです。数年前の大雪では一晩中停電していたんですよ。なので、樂觀視しないでください。雪が積もる前に、必ずお帰りくださいね」

「わかりました。気を付けます」

素直に返事して岡島を安心させる。とはいえ、早めに上がれば、それほど酷くはならないだろう。「では、仕事に戻りますね」

岡島が書齋を出ていこうとした時、彼女の携帯が鳴り響いた。美月は彼女のプライバシーを守ろうと傍を離れ、デスクに本とノートパソコンを置いた。

「ええっ!? 大丈夫なの!」

叫び声に、美月はそちらに目を向ける。岡島が携帯を握り締めて、あたふたしていた。そして「これからすぐに戻るから待つてなさい」と言い、通話を終わらせる。

「芦名さん、すみません。急用で自宅に戻らなければならなくなりました。お一人にさせてしまいますが、大丈夫ですか?」

青ざめた表情とそわそわした様子から、問題が生じたのがわかった。

「はい。でも、わたしがこちらに残っててもいいんですか?」

「大丈夫です。旦那さまの留守中に芦名さんが来られるかもしれないと伺ってましたので、そのあたりのご指示はいただいておりますから。私はあとで戻りますが、この天候でどうなることか。ですから、私の帰りを待たずに早めに帰ってください。セキュリティは自動でセットされますので、心配無用です」

小野塚邸は明治時代に建てられた洋館だが、設備は最新システムを導入している。なので、美月が勝手に帰っても、自動的にセキュリティが作動するという。

「わかりました。わたしは大丈夫ですから、岡島さんもどうぞ気を付けてくださいね」

「ありがとうございます。もし何かありましたら、私に連絡を……」

そう言っでデスクの上にある電話機を指したあと、岡島はいそいそと書齋を出ていった。

「大事でなければいいけれど……」

美月は岡島を見送って仕事を始める。

それからどれぐらい経っただろうか。空調が効いているはずの部屋の温度が、急激に下がってきた。

室温を上げようと壁に備えられたタッチパネルの方へ歩き出すものの、ふと背後の窓に意識が逸れる。何気なくそちらに目を向けた瞬間、外の光景に絶句した。

しばらく呆然としてしまったが、美月は我に返ると即座に窓際に駆け寄る。

「な、何これ……」

そこに広がっていたのは、一面の雪景色だった。視界は霧がかかったように白くなり、数メートル先も見えないぐらい降りしきっている。

美月は慌てて腕時計に視線を落とした。感覚的に一時間ぐらいいか経っていないか思っていたが、既に十七時を過ぎていた。仕事に集中していたせいで、時間の感覚がなくなっていたのだ。

「どうしよう。……岡島さん!」

美月は書齋を飛び出して岡島の名前を呼ぶ。でも返事はなかった。

当然ながらこの大雪では、彼女が小野塚邸に戻ってこられるはずがない。

とりあえず帰れるかどうか外の状況を調べようと玄関へ向かい、そこにある草履を借りてドアを